

【資料】

発達年齢2歳の「自他の領域分化群」および「自他の領域未分化群」の発達の特徵

両群の違いは検査場面における課題への取り組みの様子全般にもみられた。すなわち、「自他の領域分化群」は3名がいずれも、検査中に席を離れることはみられず、テストが次に出してくる課題を期待をもって待っている様子がみられた。また、テストが記録をとっているとのぞき込んでくるなど、他者がしていることに対して関心をもち、「待つこと」や「期待すること」といった態度が示された。

それに対して、「自他の領域未分化群」は4名がいずれも、検査中に席を離れて、検査器具の中身を自分で引っ張り別してきたり、ウロウロして他のもので遊び始めるといったことがみられた。このような、テストとのやりとり関係の文脈から外れた行為は、言語性の課題への応答や言語的なやりとりにおいてもあらわれた。その主な内容を表6に示す。

これにみるように、「自他の領域未分化群」では、「絵の名称」「色の名称」「数唱」のように対応関係が明確で、一定のパターンで応えられるものに対しては、次々に答えが返ってくるが、その一方で、自己ペースでのおしゃべりの展開や問いと答えのちぐはぐさが認められた。

以上より、両群それぞれの自我形成過程における発達の特徵として、次のようにまとめることができる。「自他の領域分化群」では、他者がしていることに対して関心をもち、「待つこと」や「期待すること」といった態度がみられる。それにより、モデルや例示を自己の領域にも、自分なりに取り込んでみようとする可能性が大きい。また、状況や文脈を把握し、課題に応えたことに対して達成感がみられ、またそのことを他者と共感しようとする。

一方、「自他の領域未分化群」では、自分のペースが強く、他者を受けとめて、自分をコントロールすることに弱さがみられる。それにより、モデルや例示を自己の領域に取り込むことに困難さを示し、自己展開しがちである。問いと答えにちぐはぐさがみられたり、あるいは、一定のパターンを繰り返すことによって応えようとする。

表6 自他の領域未分化群における言語的やりとりにみられる特徴

被検児	やりとりの内容
No.3	「ねこのファミリーちゃん」をめぐるイメージをひとりで展開している。突然、「わーはっはっは」と大きな声を出す。積み木でつくったものに（何ができた？）と聞くと「1, 2, 3, 4, …」と数え始める。「4つの積み木」に対して（いくつあった？）と尋ねると、「積み木は赤」と答える。了解問題で（眠くなったらどうする？）には「クイズ。あります」、（学校が火事だったらどうする？）には「緑でした。ピンクでした」と返答する。一方、「絵の名称」「色の名称」など、パターンで答えられる場合は、すぐに正確な答えを返す。
No.5	検査場面では、ほとんど発語が聞かれなかった。（Yちゃんを描いて）と求めると、描画後「げげげの鬼多郎」と命名する。
No.6	「短文暗唱Ⅰでは、「犬はよく走ります」を「猫はよく走ります」とする。（何歳かな？）には「書くんです」、「性の区別」で（Yちゃんは？）「女です」（じゃあお母さんは？）「ないです」と、ずれた答えが返ってくる。「あと何しようかなあ」「今度何描こうかなあ」ということばが繰り返し聞かれるが、テストとのやりとりにおいてや課題の節目で発せられるのではなく、自我をかいくぐって発せられているとは感じられない。
No.8	「ケロッグ、グリコ、花よりだんご」というテレビのフレーズを繰り返している。言葉による応答は難しいが、「絵の名称」「色の名称」「硬貨の名称」形の名称など、一定のパターンで応えられるものに対しては、自分から次々にカードをめくって名称を言う。ただし「色の名称」の色や「重さの比較」の重りを数えるといったちぐはぐさがみられる。「姓名」や「3数復唱では」発語では応えにくいのが、文字、数字で書いて示す。

（注）

寺川 志奈子「養護学校小学部における発達年齢2歳の障害児の発達の特徵と教育指導上の課題」  
「鳥取大学教育学部研究報告」第39巻第1号 PP13, 14 平成9年7月31日発行